O2-003

特別支援学校で医療的ケアを担う看護師の職業的アイデンティティと教育者との連携の工夫

中筋 未稀、桑田 弘美、久保田 牧子、田村 彩
滋賀医科大学医学部 看護学科

【目的】
特別支援学校で医療的ケアを担う看護師(以下学校看護師)の職業的アイデンティティ（以下職業的ID)と、教育者との連携の工夫について明らかにする。
【方法】
研究デザインは質的帰納的研究で、研究対象者は近畿圏内の特別支援学校に勤務する看護師10名。倫理的配慮として、滋賀医科大学倫理委員会の承認を得て実施した。
【結果】
研究対象者は30 ～ 50歳代の10名で、特別支援学校の勤務年数は平均5.4年であった。分析の結果、学校看護師の職業的IDについて、121のコード、24のサブカテゴリーから、[生徒の個性と学ぶ権利を保障] [生徒から働く活力を享受] [保護者と生徒に寄り添い家族の成長を実感] [学校看護師としての普遍性が強み]の4つのカテゴリーが抽出された。また、教育者との連携の工夫について186のコード、35のサブカテゴリーから、[教員に譲歩することを心がけ] [看護師としての視点を教員に伝達] [教員の受け入れが整うことでスムーズに連携] [生徒の力を発揮できるよう授業をサポート] [生徒の安全を最優先できる方法を教員と検討] [教員と役割を認識して協働]の6つのカテゴリーが抽出された。
【考察】
学校看護師の職業的IDとは、生徒の個性と学ぶ権利を保障できること、生徒から働く活力を享受できること、保護者と生徒に寄り添い家族の成長を実感できること、そして学校看護師としての普遍性を実感し、その普遍性を発揮することであると考える。教育者との連携の工夫として、丸山(2006)は、多職種の役割を適度に補いつつ、根本的な部分では多職種の職域を脅かさない配慮を持ち続けることがより良い連携の取り方につながると示唆している。
本研究においても学校看護師は教員に譲歩することを心がけており、教員とスムーズに連携を取っていた。しかし、そのような中で生徒の安全のために必要である看護師としての視点を教員に伝達することを心がけていた。さらに、生徒の力を発揮できるよう授業をサポートしたり、生徒の安全を最優先できる方法を教員と検討することで、生徒に安全で充実した教育を提供することにつながっていると考えられる。他職種間で密な連携をとることは、その小児に安全な医療的ケアが提供され、教育を受ける権利が守られる(立松、2013)とされており、医療者と教育者という異なる職種ではあるが学校看護師は[教員と役割を認識して協働]していくことが重要であることが示唆された。

O2-004

普通校における医療的ニードのある慢性疾患をもつ児童生徒の実態と養護教諭の意識

高野 政子[1]、安部 由紀恵[2]、足立 綾[1]
[1]大分県立看護科学大学 看護学部 、
[2]新別府病院

【緒言】
本研究の目的は、A県内の普通校にける医療的ニードのある児童生徒の実態と養護教諭の支援についての認識を明らかにすることである。
【方法】
調査は平成26年8から9月、無記名の自記式質問紙法で実施した。対象者はA県内の小・中・高等学校に勤務する養護教諭とした。調査項目は、対象者の属性と学校の背景、在籍する児童生徒、医療的ニードのある児童生徒の人数と実施者、健康管理、医療的ニードに対する考え7項目、検討が必要な方策8項目、支援の困難感10項目、自由記述で構成し、合計52項目とした。4段階のリッカート法で回答を得た。各項目と3群間に分けた属性ではKruskal Wallis検定と多重比較を行い、2群間に分けた属性ではMann Whiteny検定を行った。データの分析は統計ソフトSPSS 20.0を使用した(有意水準5％)。本研究は、所属大学の研究倫理安全委員会の承諾を得て実施した。
【結果】
質問紙は440部を配布し、135部を分析した。対象校の医療的ニードのある児童生徒は114名であり、疾患は慢性呼吸器疾患や心疾患などであった。また、対象者の属性と支援に対する考えの7項目について関連を検討した結果、属性のうち「教諭経験年数」の3群間と「医療的ニードのある児童生徒の在籍有無」の2群間で、意見に統計的な有意差を認めた(表1)。医療的ニードのある児童生徒の在籍有り群(3.41±0.71)は、無し群(2.91±0.97)よりも「救急・応急処置は仕事内容の一部であり積極的に関与すべき」と考えていた($p<0.01$)。一方、「本来の職務に支障をきたすためできれば関与しないほうが良い」(2.43±0.99＞1.94±0.88)、「児童生徒の安全確保に自信がないためできれば関与したくない」(2.39±1.01＞2.00±0.84)、「養護教諭は医療従事者でないため積極的に関与するべきではない」(2.87±1.04＞2.41±0.95)という否定的な3項目では、医療的ニードのある児童生徒の在籍無し群が有り群よりも同意していた($p<0.05$)。
【考察】
普通校では、医療処置の吸入や自己注射などは児童生徒が自己管理しており、養護教諭は、けいれん発作時の救急処置が主な関わりであった。また、医療的ニードに支援が必要な児童生徒が増加しており、養護教諭の職務の多忙さやケアの安全性から、児童生徒がケアを安全に実施できるように看護師などの配置を望む意見も多かった。

Presented by Medical*Online